

松村通信第 105 号

2020 年 2 月 11 日
松村勝弘

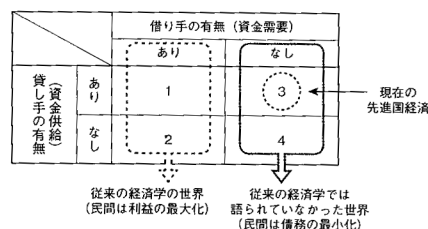
被追国日本を考える

MMT を乗り越える 最近は乱読気味である。リチャード・クー、川島睦保訳『「追われる国」の経済学』東洋経済新報社、2019 年というのを読んだ。すごく納得いく本であった。とりわけ、前号で紹介した MMT がペン先一つでマネーが生み出せるとしたところに引っかかっていたら、こちらはそれを批判していた。「銀行は融資をする際に、現金や同行が中央銀行内に持つ口座に十分な残高を保有していなければならないということである。そうでなければ、銀行は代金の支払いも融資もできないからだ。したがって、銀行は無の状態からマネーを創造できるという考えはまったくのナンセンスである。融資ができるのは、豊富な現金と準備を持っている銀行だけだからだ。」(462-463 頁)

でも、金融政策一本槍での政策運営を批判する点では MMT と共通している。財政政策重視を提言している点では MMT と共通している。とりわけ近年の新古典派経済学に批判的である。私が日頃新古典派経済学に対して抱いている疑問についても納得いく答えを用意してくれていた。とりわけ近年の経済学は現実から遊離していると思う。近年は基礎的な統計データもたくさん作られている。国民経済計算などもっと大事にすべきだと考える。経済学部の先生と話していたら国民経済計算など余り教えられていないと聞いて、経済学を教えている先生たちは具体的な議論を余り好まないのだと理解した。私は具体的なリアルに問題を捉えるべきだと考えている。

投資機会喪失 従来の経済学者は右図表 1-3 のケース 1 と 2 の時しか想定していない。今日ケース 3 や 4 であるとして、適切な政策を考えるべきだと言っている。投資機会がなくて借り手不在の中でいくら低金利や量的緩和といった金融政策をしても景気は浮揚せず、バブルとバブル崩壊を繰り返すだけだと言っている。しかも金融機関が不良債権問題を抱えているとケース 4 となってしまう。景気浮揚策は財政出動しかないのに、EU のよう

図表1-3 貸し手と借り手の状況の違いが生み出す四つの局面



- ケース1 貸し手と借り手が十分な数存在し、金利の微調整で経済が安定的に推移する理想形=教科書の世界
⇒適常金利
- ケース2 实体经济に借り手はあるが、不良債権問題などで貸し手が不在=貸し手を含み金融危機
⇒政策金利よりずっと高い貸出金利
- ケース3 貸し手はあるがバランスシート問題や投資機会不足で借り手が不在=バランスシート不況を含む景気低迷
⇒超低金利
- ケース4 借り手主導のバランスシート不況と貸し手主導の金融危機が同時発生しているケース
⇒高格付者のみ超低金利

に、マーストリヒト条約下で政府は縛られている。こんな時に緊縮財政をすれば景気は悪化するばかりである。欧州は不況が続くだろうし、日本も債務限界説を持ち出してすぐに緊縮しようとしてデフレを続けている。米国だけはバランスがよい。

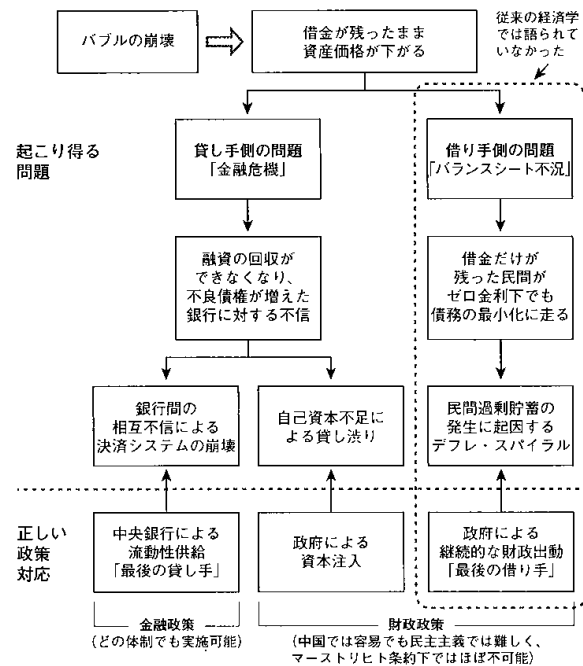
財政出動 債務限界説を批判するからといって MMT のように、無制約に債務を増やさないとはいわない。「経済がケース 3 と 4 にある時に債券市場が発する超低金利というシグナルは、市場が政府に対して、この超低金利を上回る社会的リターンのある公共事業を探して実施しろというメッセージである。そのようなプロジェクトは、収益が資金コストを上回っているため自己ファイナンスができているということであり、もしそうしたプロジェクトが見つければ、政府はそれらを実施することによって、将来の納税者の負担を増やさずに必要な財政出動を継続することができるからだ。」(202 頁)そして「自己ファイナンスできる事業を発掘して実施するのだが、それには高度に訓練された専門家からなる独立委員会の存在が不可欠」(206 頁)としている。社会的収益力の見込みうるプロジェクトで財政出動すべきだというわけである。ただここでの社会的収益見込みについての具体的な計算は行われていない。

国際資本移動 また、国内に投資機会がないだけでなく、新興国でもっと資本利益率の高

い投資機会があるから、資本は海外へ流れる。「ここでの根本的な矛盾は、国同士は合体する意志がないのに、金融市場はあたかも単一国家であるように振る舞っているところから生じているのである。トランプ大統領は今日の問題の原因は自由貿易にあると主張しているが、現実には巨大な世界不均衡を引き起こしているのは自由化された資本移動の方なのである。資本移動の自由化と、それがもたらす各国の対外不均衡が放置されている限り、貿易摩擦や保護主義は今後とも重大な政治・外交問題であり続けるだろう。」(516 頁)とこのように、自由で野放図な国際資本移動に批判的である。

バランスシート不況 MMTの前にこの本を読むべきだったが、この本の出版が昨年 11 月だから、そういう順序にならざるを得なかった。リチャード・クーがバランスシート不況(図表 8-1 参照)を以前から指摘していたの

図表8-1 大学で教えてこなかったバブル崩壊後のマクロ経済



(出所) 野村総合研究所作成

は知っていたが、その体系は分からなかった。今回はそれを体系的に論じているので、理解できた。617 頁という大部の本だったが一気に読んでしまった。わかりやすかったからとも言えるが、ほぼ納得できた。

日本の近代化 閑話休題。日本の近代化について考える時、「われわれが近代化過程をとらえるときに、それぞれの部分を単独にとら

えて一面的礼讃者になったり、あるいは一面的告発者になったりするのではなく、両者を統合的にとらえ、その構造関連を明らかにするという姿勢が一つの近代化過程をとらえる場合に必要だと思えます。」(源了圓『実学思想の系譜』講談社学術文庫、26 頁)というあたりが妥当かなと考えている。ただ、[デューイいわく]「『日本は科学・産業・行政・戦争および外国の技術を西洋から学んだが、これを伝統的な自国の政策遂行のための道具としたにすぎない。日本は、西洋の方法の優越性を無条件にみとめる。しかし、これらの優越した方法は、外国思想に対して、本質的に優越した東洋思想を維持するために使用されるべきだと考えている。』

だから日本の場合は、西洋文明はほんのどってつけた借り着で、デモクラシーとか自由主義とか叫んでみても、一向に身につかない。これに反して、

『中国はその文明を他から借用したのではなく、自分自身でつくりあげたのである。』……中国の問題は、いかにしてつくりかえるか、いかにして自分自身の中からつくり出すかということである。中国には、その後進性と混乱と弱さにもかかわらず、日本よりもはるかに現代西洋思想がしみこんでいる。』

中国人は自分たちの文明に対して、心の底から自信をもっている。だから日本のように人のものをちょっと借りてくるなどということは、自尊心が許さない。ところが日本人は、外国人が、自分たちをどうみているか、何と云って批難するか、ということばかりに気をとられている。だからわざとよくみせかけ、実際ある以上に進歩的だというみせびらかしをしたがる。そのために、日本の近代化は外観的には急速に行われたが、結局根を下ろしていない。それに反して、中国の近代化は、テンポはおそいが、確実な方向にすすみつつある。」(鶴見和子著『デューイ・こらいどすこおぶ』未来社、1963 年、82-83 頁)これなどを読むと悲しくなる。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。皆さんのご意見を歓迎します。HP (<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。フェイスブックもやってます。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい (matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。